「正月予祝行事（田遊び）が子どもたちに見せるもの」

山崎 敬子 （玉川大学芸術学部非常勤講師・学習院大学さくらアカデミー講師）

青森県八戸市を代表する民俗芸能のひとつである「八戸えんぶり」は、春を呼ぶ地域行事であると同時に国の重要無形民俗文化として指定されている、日本の農耕民俗文化を語る上で欠かせない民俗芸能である。

そもそも民俗芸能とは、日本の自然環境の下で暮らす日本人の信仰的な「心」の部分の文化的な表出（心意伝承）として行われるもので、地域固有の生活形態の中で受け継ぐべき生活経験（行動伝承）として、周期的に行うしきたり（周期伝承）として地域で形成された芸能である。ゆえに、その地域の経済基盤と大きく直結し、農作が基盤であれば農作の、漁業が基盤であれば漁業の実りを期待する祈りの表出となる。

結果、古来より稲づくりを主たる生活基盤とする日本風土としては、必然的に農耕神事や行事が各地に定着し、「田遊び」「「田植神事」などの行事が全国に存在する。地域で名称はたがえど、いずれも稲づくりに関する民俗行事で、前者の「田遊び」は年始めの時期にその年の豊作を祈願してあらかじめ祝いをする「予祝」の芸能で、これから行うであろう稲作の作業過程を順序通りおこなったと褒めながら模擬的に演じる。一方、「田植え神事」は田植えの時期に楽器や唄で囃しながら実際に田植えを行うもので、両者は時期や芸態は大きく異なる。また、田植え神事の芸能部分が独立したものが、後世に「田楽」となってゆく。

さて、田畑の土をならす農具「えぶり」にその名が由来する八戸えんぶりもその年の豊作を祈願するための田遊び系の行事であり、種まき、田植えなど稲作の一連の動作が舞の中で演じられる。一方、その舞いの合間に行われる子どもたちの祝福芸が見られ、子どもが祭りに大きくかかわっていることも祭りの特徴のひとつである。

子どもが大人たちと共に祭りに加わる意義とは何か。古くから日本では祭礼に子どもが参加しており、現在においても全国各地で行われる「稚児行列」が有名な事例だろう。これは稚児（おおよそで３～10 歳前後ほど）が神様に近い存在である穢れなきものとして神聖視されてきたことによるものだ。八戸えんぶりの場合は、その稚児性もさることながら子どもとして大人と対等にかかわっていることに意義があるように思われる。

信仰面もさることながら、まず雪に覆われた八戸の冬の行事ということにも意義を感じる。予祝の芸能を行う時期（雪季）は、これからの農作業に備えた、いうなれば農閑期である。大人たちも子どもに目を向ける時間が増え、子どもたちも安心して過ごせる時期であったともいえる。つまり、「時間の共有」である。現代社会においては「農閑期」という感覚は

薄まりつつあると思われるが、現代においても親と子の時間の共有は教育上大切なものであることは変わりない。

さらに、祭りでの親以外の大人たちとの時間の共有体験は、子どもにとって地域社会とのかかわり方を学ぶ上で大切な経験となる。子どもは成長すれば大なり小なり親の仕事を手伝うようになり、やがては成人し、地域社会に仲間入りをする。祭りの座組の中で仲間入りをすることで、地域に「認められる」感覚を得ながら社会性を学ぶことになるのである。

2011 年の東日本大震災後の福島県の復興を事例に、祭りと民俗芸能の意義について、懸田弘訓・民俗芸能学会福島調査団長は「無病息災や豊作祈願などの信仰であることは、学術的には当然なのであるが、それに加えて地域の絆を深める、あるいは地域づくりの核になっているのが、この芸能や祭りなのだ」「練習で一つのものを創り上げていく過程で、思いやりやいたわり、助け合いの心、共通理解や団結心などが高まってくる。それが地域づくりの根幹になるのである。」（引用/2018 年『福島大学地域創造』第 29 巻 第 2 号 153 ページ）と述べているが、これは全国に共通することであろう。

これら意義のために不可欠な要素が大人側の意識である。親のみならず地域の大人が子どもたちに対し、祭礼参加を通して何を教えたいか、伝えたいか。生活基盤が必ずしも一致しない現代社会においてこそ大人側の意識の共有の必要性は高まっているように感じる。

今回の「子ども学コロキウム＠東北」の会場で、大人側の役割について登壇者や参加者がそれぞれの立場から意見を闊達に交わされたことは、非常に意義深いものがあった。行政からの目線、地域からの目線、学術からの目線…さまざまの立場ではあるが、何よりも子どもたちの成長過程で最初に接する社会＝幼稚園（保育園含む）の現場からの目線。幼稚園（同）という子どもが社会にかかわる現場で教育者として子どもたちに接される皆様と、八戸えんぶりという地域文化を通した教育論を語り合うことは、八戸の地域社会の未来を語ることであった。そして同時に、このような議論は他地域でも必要な議論である。

コロキウムそして日本子ども学会様の今後のますますのご活躍を祈念しております。